大東文化大学　博士学位論文審査報告書

氏　　名	周　瑛英
学　　位	博士（日本文学）
学位記番号	甲第１４２号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 22 日
審査研究科	文学研究科
論文題目	推量助動詞の意味・用法
論文審査委員	（主査）大東文化大学准教授　冨樫 純一 （副査）大東文化大学教授　美留町義雄 （副査）大東文化大学教授　山口 淳史 （副査）大東文化大学教授　猪股 謙二

博士学位論文　審査報告書

氏　名　　周　瑛英

学　位　　博士（日本文学）

論文題目　　推量助動詞の意味・用法

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

２．　論文の要旨・構成および特色

本論文は、現代日本語の推量助動詞「らしい」「ようだ」「ぽい」「みたいな感じ」「だろう」および終助詞「ね」「よね」における会話上でのさまざまな用法を、基本的意味からの派生という観点をもとに詳細に分析したものである。以下に論文の目次を示す（一部、細かい節タイトルは省略した）。

第１章　序論

1.1.　モダリティの概念

1.2.　認識モダリティの概念

1.3.　本研究の問題提起と目的

1.4.　本研究の考察方法と概要

第２章　「らしい」と「ようだ」の用法について

2.1.　はじめに

2.2.　「らしい」と「ようだ」の意味・用法の違いについての先行研究

2.3.　「らしい」について

2.3.1.　責任回避用法

2.3.2.　人間関係を維持する用法

2.3.3.　まとめ

2.4.　「ようだ」について

2.4.1.　結果的責任回避用法

2.4.2.　人間関係を維持する用法

2.4.3.　まとめ

2.5.　「らしい」と「ようだ」

2.6.　おわりに

第３章　助動詞「ぽい」の意味・用法

3.1.　はじめに

3.2.　助動詞「ぽい」の意味・用法に関する先行研究

3.3.　助動詞「ぽい」の意味・用法

3.3.1.　助動詞「ぽい」の「証拠あり推量」用法

3.3.2.　助動詞「ぽい」の「証拠なし推量」用法

3.3.3.　助動詞「ぽい」の「回避」用法
3.3.4.　まとめ
3.4.　おわりに

第４章　「みたいな感じ」の意味・用法
4.1.　はじめに
4.2.　「みたいな感じ」と「みたいな」の先行研究
4.3.　「みたいな感じ」について
4.3.1.　基本的な意味（例示）
4.3.2.　会話調
4.3.3.　曖昧な先行文脈について
4.3.4.　まとめ
4.4.　おわりに

第５章　推量助動詞の文頭表現
5.1.　「だろう」の文頭表現について
5.1.1.　はじめに
5.1.2.　先行研究
5.1.3.　「だろう」の文頭表現の上昇調
5.1.4.　「だろう」の文頭表現の下降調
5.1.5.　「そうだろう／でしょう」について
5.1.6.　おわりに
5.2.　他の推量助動詞の文頭表現について
5.2.1.　はじめに
5.2.2.　「みたいだ」と「らしい」の文頭表現について
5.2.3.　まとめ
5.3.　「ね」と「よね」
5.3.1.　「ね」について
5.3.2.　「よね」について
5.4.　「ですね」「ですよね」の文頭表現について
5.4.1.　問題の確認
5.4.2.　「そうですね」についての先行研究

5.4.3.　「よね」についての先行研究
5.4.4.　「ですね」「ですよね」の用法について
5.4.5.　おわりに

第6章　結論
6.1.　推量助動詞の認識的な意味・用法について
6.2.　今後の課題

参考文献
用例出典

以上の目次から明らかなように、現代日本語の推量助動詞（モダリティ形式）について意味・用法の分析を試みている。推量助動詞の研究は多くの蓄積があるが、それらを踏まえつつ、新たな用法の存在を導出している。

本論文は、分析対象の異なりから大きく二つに分けられる。一つは第2章～第4章における推量助動詞の文末での使用に関する分析である。いわゆる通常の本来的な使用であるが、そこに新しい用法、聞き手に対しての細やかな働きかけがあると指摘する。文ー文法の観点からだけではうまく説明することのできない働きを、会話つまり話し手と聞き手の相互行為という観点から導き出そうとしている。

二つ目は第5章における分析である。ここでは推量助動詞の文頭使用（「だろう」や「みたいだ」だけを発話するもの）に注目し、文末使用とは異なった働きを有していることを明らかにしている。助動詞は本来、動詞や形容詞などに接続した形で、かつ文末で用いられるものである。しかし、日常会話では時として助動詞のみが単独で発話される場合が見られる。この特殊な使用には独自の働きがあるはずである、と考え、さまざまな実例をもとに、文末用法とは異なる働きを見出している。

このように、本論文では推量助動詞が実際の会話の中でどのように使用されているのか、という点に着目し、会話という相互行為にどういった影響を与えているのか子細な分類を試みている。特に第5章の分析は先行研究でも取り扱われていない対象であり、今後の助動詞研究、会話分析研究の大きな礎になるといえるだろう。

次節で各章の内容を詳述する。

３．　論文の審査内容および評価

本論文の第１章では、モダリティの基礎的概念、考察対象、分析方法を示している。モダリティとは、客観的な事柄に対して話者が示す心的態度のことである。例えば「明日雨が降るだろう」という文において、「だろう」がモダリティを担う形式であるが、これは「雨が降る」という事柄が起こる可能性があると話者が認識していることを示す。モダリティの分析の中心は、事柄を話者がどのように認識しているかという点に注目することにあるといえる。

しかし、日常会話では当然ながら聞き手が存在する。ということは、モダリティ形式の使用には、話者の事柄に対する心的態度の他に、聞き手に対する心的態度も認められるはずである。周氏はその点に着目し、会話という相互行為において、モダリティ形式がどのように機能しているのかを具体的な実例をもとに分析を試みている。

このような観点からの分析はまだあまりなされておらず、周氏の先見性が窺えるものであろう。第２章以降はこの問題提起に基づき、具体的な推量助動詞（モダリティ形式）の分析を行っている。

第２章では、推量助動詞「らしい」と「ようだ」について、新たな用法の導出を行っている。「らしい」「ようだ」ともに、事柄に対する心的態度に関しては、先行研究の指摘通り、何らかの他の情報をもとにしてその事柄を推測・認識した、という意味を表す。証拠性と呼ばれる概念を持つ助動詞である。しかし、実際の会話では、単純に事柄への心的態度を示すだけではなく、聞き手への態度も示すことになる。さまざまな会話資料を分析した結果、「らしい」と「ようだ」は聞き手への心的態度が異なることが明らかとなった。「らしい」は、「他の情報をもとにする」という点から、話者自身の発言責任を回避しようとする用法を持つ。「ようだ」は、「推測をする」という点から、話者の（強く言い切るような）断定的な態度表出を避けて、聞き手との良好な人間関係を維持しようとする用法を持つ。ほとんど同じ基本的意味を有する二つの助動詞であるが、会話においては聞き手にどのような影響を与えるのかが異なることが結論として示されている。

周氏の分析は、事柄に対する心的態度という基本的な意味を踏まえ、そこから派生した新たな用法として位置付けており、そこに論理的な矛盾、アドホックな説明は見られない。会話での助動詞の使い分けを記述していく上で、重要な指標となるべきものであろう。

第３章では、助動詞「ぽい」についての分析を試みている。「明日雨が降るっぽい」のような文に見られる「ぽい」である。比較的新しい表現であるが、これも推量助動詞と捉

えることができる。新しい表現であるため、若者言葉・流行語という視点からの分析が主となっており、基本的な意味の分析はまだ多くはない。したがって、聞き手に与える影響についても分析はなされておらず、その点では、本章の分析が助動詞「ぽい」の総合的考察の出発点となるといえる。

本章ではまず、「ぽい」の基本的意味の導出を試みている。「らしい」や「ようだ」と異なり、「ぽい」には、何らかの証拠に基づく推量と証拠に基づかない推量という二つの意味があると指摘している。それぞれ「証拠あり推量」「証拠なし推量」と呼んでいる。「らしい」等よりも意味の幅が広いことが「ぽい」の特徴であり、幅が広いからこそ、若者を中心に使いやすい表現として広まっているのである。

そして、この基本的意味を土台として、聞き手に与える影響も分析している。一つは「証拠がある」ことから派生した、話者の責任を回避する用法である。自分の発言が絶対的なものではないことを聞き手に示し、責任の所在を曖昧なものにするのである。もう一つは「ぽい」が付加された文は話者が提示する話題の中心ではないことを示す「前提提示」の用法である。これは「回避」という概念をさらに派生させ、責任ではなく話題を回避させ（て別のものにす）ることが目的となっているのである。このように「ぽい」には多種多様な用法が備わっていることが明らかとなった。前章の分析と同様、聞き手への影響を見据えた考察は卓見に満ちているといえる。

第４章では、助動詞「みたいだ」とその派生形である「みたいな感じ」を分析している。「みたいだ」は「ようだ」とほぼ同じ意味を持つ推量助動詞であるが、「みたいな感じ」は「嫌だな、みたいな感じ」のような新しい表現も定着しつつある。本章では、先行研究における「みたいだ」の意味分析を足掛かりに、「みたいな感じ」が持つ独自の用法を導出している。結論として、「みたいな感じ」には話者自身の主張を抑えて、自然な会話の流れ（聞き手が共感しやすい・理解しやすい流れ）を作りやすくする働きがあることが明らかとなった。

「みたいだ」とは異なり、「みたいな感じ」では聞き手に対する意識のほうが（基本的な推量の意味よりも）強く現れていると指摘する。「みたいな感じ」自体が新しい表現であるため、先行研究が少ない。本章の記述はこれからの分析の礎となりうるものとして評価できる。

第５章は先述したように、推量助動詞の単独使用を対象としたものである。単独使用（本章では「文頭表現」と呼ぶ）は次のような使用方法である。

話者Ａ：そのジャケット、似合ってるよ。

話者Ｂ：でしょう？

（ここでは普通体「だろう」と丁寧体「でしょう」は同じものとして扱っている）

話者Ｂの発話は推量助動詞「だろう」が単独で用いられている。ここでの問題は、単独で使用することの目的である。単純に考えれば、事柄が省略された表現として分析されるものであろう。しかし、会話データを丹念に調査した結果、単独で用いることに独自の働きが認められた。それは指示表現である「そうだろう／そうでしょう」との比較が手掛かりとなっている。例えば「だろう」の基本的な意味は推量と確認である。文頭用法における「だろう」は、そのどちらでもなく、確認の意味から派生した、聞き手との共感という新たな働きを有するのである。単独用法そのものは頻繁に日常会話で観察される現象である。これを単なる省略と捉えるのではなく、そこに独自の働きを見出そうとする分析態度は非常に示唆に富んでいるといえる。

本章では「だろう」の文頭用法と比べる形で、「らしい」と「みたいだ」の文頭用法も分析している。面白いことに、「らしい」「みたいだ」の文頭用法には独自の働きはなく、文末用法の単なる省略であると結論付けている。同じ推量助動詞であっても、用法の位置付けが異なっているという指摘は興味深いものである。残念ながら、他の推量助動詞については詳述されていないため、文頭用法の全体像は明らかとなっていないが、今後の分析が大いに期待されるところである。

また、他の文頭用法に目を向けると、終助詞「ね」「よね」が視野に入ってくる。

話者Ａ：最近は変な天気ばかりね。

話者Ｂ：ですね。

（ここでは「です」が付加した形を対象としている）

推量助動詞ではないものの、本来何らかの事柄に付くべき終助詞が単独で用いられている点は「だろう」と同様である。これらの分析を試みると、終助詞が持つ基本的な意味である同意や確認から派生した、「同感」「衝突緩和」という独自の用法が認められる結果となった。いずれも聞き手への態度を表出するものであり、聞き手への影響に注目するという分析観点が推量助動詞以外のモダリティ形式分析にも対応可能であることを表している。

第６章では、論文全体をまとめ、今後の課題・分析の方向性を述べている。

全体を通して見ると、単語の意味を捉えることよりも、会話という相互行為において会話参与者に与える影響の詳細な記述に力点が置かれた研究であると位置付けられる。もちろん、聞き手への影響というものは場面や文脈により多種多様になってくるものである。本論文ではそれについて基本的意味からの派生という統一した視点により、論理的な破綻をきたすことなく的確な説明がなされている。周氏の分析態度は一貫したものがあり、それが論文の完成度を高める結果となっている。

第６章で周氏自身が述べているように、解決していかなければならない問題点も少なからずある。いくつか挙げると、用法の記述にやや恣意的な、結果ありきな説明が見られる点、インタビュー記事やブログなど、会話データという観点ではやや不適切な資料を取り上げている点、各章間の概念規定が不統一な点などがある。今後発展させていく必要があるだろう。推量助動詞の全体像、あるいは文頭用法の全体像を記述・分析していくためにさらなる研究の進展が期待されるところである。

４．結論

以上の審査内容、評価を総合的に勘案し、本論文を対象とする博士学位論文審査委員会は全員一致で、周瑛英氏が博士（日本文学）の学位を授与されるのに適格であると判断し、ここに報告する次第である。